

がさらに大型になる。この地域に一般的な袋状土坑は、この前期末以降の動きとともに拡散するとみられる。本遺跡の約400m東方にある下村遺跡A地区は弥生時代中期初頭の集落遺跡であり、袋状土坑が検出されるが^(注12)、特徴からみてこの一般的な袋状土坑に含まれる。弥生時代以来の袋状土坑の起源を韓半島に求める見解もあるが^(注13)、本遺跡の例は、弥生時代の一般的な袋状土坑とは系譜が異なると考える。

以上から、袋状土坑SK24は、弥生時代の北部九州から響灘沿岸に一般的な袋状土坑ではなく、築造時期については、積極的な根拠は乏しいが、周辺遺構との関係から縄文時代晩期頃と考える。その性格は、埋土中から採取した土壌サンプルの花粉分析、および微細生物の洗い出しと分類・同定を実施したが、花粉化石や種実遺体は一切確認できなかった。しかし、その形状や立地からみて、貯蔵穴の蓋然性が高いと考える。

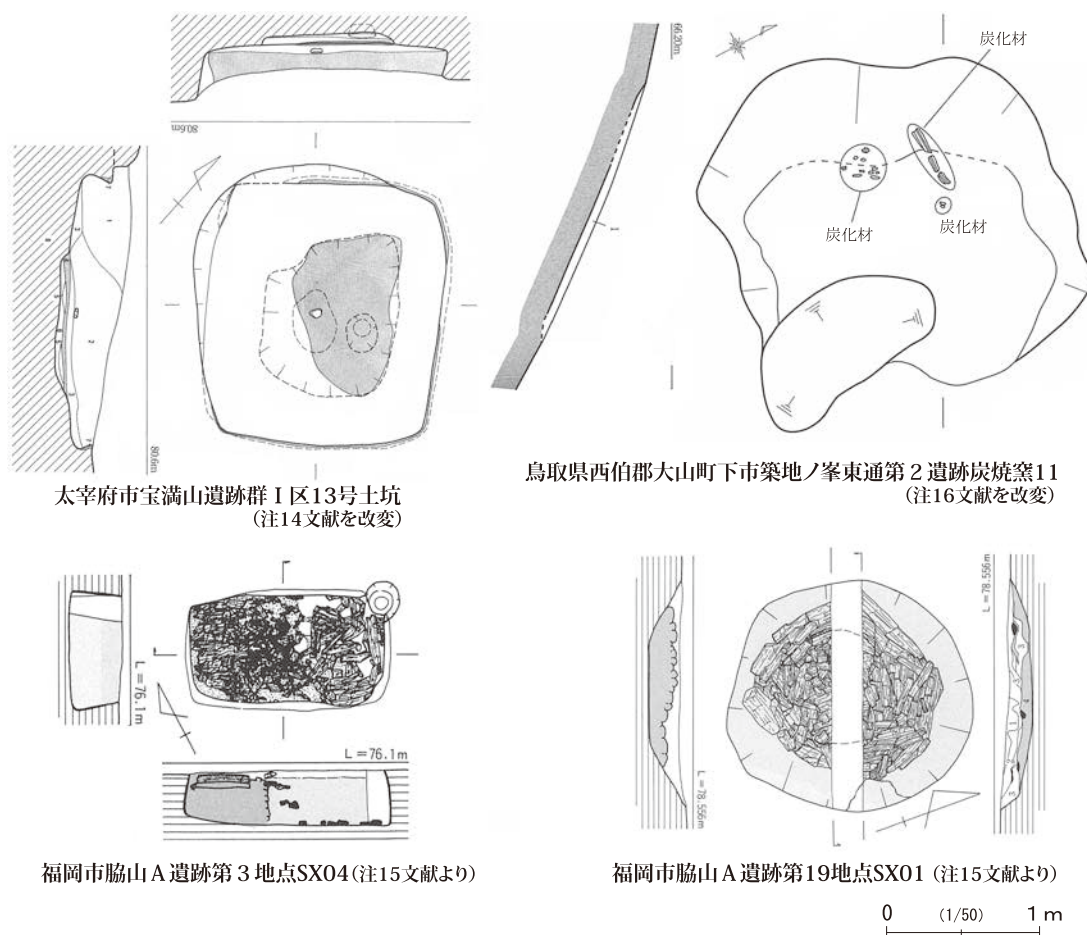
2 木炭焼成坑について（第41図）

本遺跡では、木炭焼成坑と考える土坑SK26を検出した。平面形は方形で、規模は長軸が2.10m、短軸が1.93mを測り、埋土中には炭と焼土を多く含んでいた。床面では木炭が塊状で出土したが、木炭の配置や積み上げ方法等は判然としない。時期は、放射性炭素年代測定の結果から11世紀前半～12世紀後半で、平安時代後期～末期と考える。木材の樹種同定の結果、カキノキ属やコナラ節等の広葉樹が使用されており、いずれも重硬で強度・耐朽性が高く、火力よりも持続性を目的とした硬い木炭を生産していたとされる。

このように、SK26は、積み上げた木材を燃やした後、土で覆って蒸し焼きにする、伏炭法（「伏せ焼き」）による製炭を行った土坑と考える。これまで県内では、同様な構造をもつ木炭焼成坑の例はみられない。一方、東北や北陸地方をはじめ、各地で類例がみられる。近隣地域の例として、福岡県太宰府市宝満山遺跡群のⅠ区では、窖窯型木炭窯と鍛冶炉または製錬炉のほかに、木炭焼成坑を含む焼土坑12基が検出された。そのうち13号土坑は平面形が隅丸長方形で、規模は長軸が1.75m、短軸が1.60mであり、時期は8世紀初頭に比定される^(注14)。鍛冶炉や製錬炉に併設されることから、製鉄に伴い製炭が一体的に行われていたとみられる。形状・規模ともにSK26に類似しており、木炭の使用目的を考える手がかりとなる。

福岡市脇山A遺跡では木炭焼成坑を含む焼土坑が80基以上検出された。そのうち、第3地点SX04、第19地点SX01など、木炭が放置された状態で検出された遺構が多く、木材の組み上げ方法が窺える資料である^(注15)。第19地点SX01の平面形が直径約2.1mの円形を呈するほかは、隅丸長方形を呈しており、規模は長軸が1.0～2.0m程度、短軸が0.6～1.2m程度で、大小がある。時期は、周辺から13世紀代の土坑や墓が検出されているが、はっきりしない。第3地点SX04と第19地点SX01の木炭の樹種同定の結果、前者がすべてカシ類、後者がすべてクスノキ科と判明している。木材の性質は、カシ類が堅硬で、クスノキ科が中程度の強さであり、いずれも火力と持続性が強い。

鳥取県西伯郡大山町下市築地ノ峯東通第2遺跡では、須恵器窯や製鉄炉、窖窯型木炭窯に近接して木炭焼成坑22基が検出されている^(注16)。平面形は円形・楕円形・隅丸方形・不整形があり、時期は、本遺跡のSK26と重なる11～12世紀を中心とする。炭焼窯11は平面形が方形に近い不整形を呈し、規



第41図 木炭焼成坑の例

模は長軸が2.34m、短軸が2.22mを測る。炭化材の樹種同定を行った7点は、いずれもコナラ属クヌギ節であった。この遺跡の他の木炭焼成坑についても、ほとんどがコナラ節やクヌギ節の木材を使用することから、SK26が一般的な木材を選んで使用していたと考える。

本遺跡とその周辺では、製鉄に関わる遺跡や遺構は確認できない。美祢市内には長登銅山跡があり、同市内の中村遺跡や国秀遺跡では銅鉱石や銅塊、上ノ山遺跡では炉跡のほか、銅鉱石や木炭が出土しており、集落内で銅製錬が行われたことが窺える^(注16)。これらの遺跡は7世紀代に始まり8世紀代を中心とするため、本遺跡との関係は薄い。本遺跡の包含層中から羽口片が出土しており、調査区外に製鉄や製銅に関わる遺構が存在した可能性がある。また、8世紀末～9世紀初頭の掘立柱建物SB01は、長登銅山における古代の銅山経営の時期とほぼ併行すること、包含層中から緑釉片が出土したことから、公的な施設であった可能性も否定できず、羽口片はこの時期のものの可能性がある。

さらに、先の3遺跡の事例では、いずれも木炭焼成坑が複数基で群集していた。これらは同時併存するか、築造を繰り返したとみられ、一定期間の製炭の継続を見込んでおり、生産規模が大きいと考える。これに対して、SK26は単独で存在しており、短期的でかつ生産規模も小さいと推定する。

以上のように、木炭焼成坑SK26は、製鉄等に適した木炭を生産していたが、その供給先は明らかではない。11～12世紀のある時期に、短期的に家内経営的な製炭を行った可能性がある。